



## 多様性と共感性の先にある社会

「ひこうきぐも」で紹介している通り、私は大学を卒業してからバックパッカーとして海外を15ヶ国旅して教師となりました。旅で得た体験は、私の感性を形成する要因の一つとなりました。

その旅の中で、思い出される場面があります。ニューヨークの地下鉄で、老婦人が、扉が閉まりそうになった電車に滑り込んで来ました。老婦人が息を切らせていると、そこに乗り合わせた乗客たちは、「間に合ってよかったね。」と笑顔で口々に声を掛け、まるで昔からの知人のように接していたのです。その当時の私は、多様な人種が乗り合わせる、地下鉄の中の光景に、とても驚きました。

教師となって、教室という小さな社会の中で、子供たちには多様性と共感性を求めてきました。特に本校で取り組んでいる学級活動では、話し合いによる合意形成や、集団思考を生かした意思決定が必要となってきます。子供たちの多様性を生かした「決定」を行うことで、子供たち自身に出番と居場所が生まれ、魅力ある学級の風土が培われるのです。例えば、誕生日を迎え朝から登校してくる仲間を合奏と合唱で迎えたり、全校でかくれんぼをすることを計画し実践したりと、子供たちの創造力と行動力には日々驚かされてきました。

この多様性なのですが、ただ多様なだけでは、共感性は生まれてこないのです。共感性に繋げるためには、目指すべき方向性が必要となってきます。そこで、私は学級目標を示したり、道徳教育に取り組んだりすることで、向かうべき姿や価値を共有し、多様性の拠り所としてきました。

そのためには、教室の最大の環境である教師の感性の在り様が問われてくるのです。子供の日々の成長や変化に、常にアンテナを張り巡らせ、子供の姿を捉え、「自然体」で共感できるような感覚です。

今後、社会はより一層多様化してきます。しかし、教師が学級・学校という小さな社会の中で、多様性と共感性を子供たちに育むことで、魅力ある国創りの礎となる人材が巣立っていくと信じています。

明るい未来は、帯山西小学校の子供たちが帯西レンジャーとともに活躍することによって築いてくれるでしょう。ちなみに右図は、帯西レンジャーを使って多様性と共感性をコンセプトにデザインしたものです。「Let's act toward four hearts!（「4つの心」に向かって行動しよう!）」と目指すべき方向性も表しています。この絵は近々どこかでお披露目しますので、楽しみにしておいてください。

